

点字

点字に関する12章

の履歴書



阿佐博
著

『点字の履歴書』

点字に関する12章

目 次

はじめに

第1章 点字以前	3
1. ヨーロッパの塙保己一	3
2. サンダーソンの計算盤	3
3. バランタン・アウイの凸字	5
4. ムーンタイプ	7
5. ボストンタイプ	10
6. クラインの針文字	10
7. 針線凸字	11
8. 結び文字	12
9. 楽善会	12
10. 葛原勾当日記	16
第2章 点字の開発	17
1. 点字の誕生	17
2. ルイ・ブライユの生涯	25
3. 点字のふるさとを訪ねて	33
第3章 英語点字の統一	39
1. アーミテージの業績	39
2. ニューヨークポイント	40
3. 点字戦争	43
4. 英語点字の統一	46
第4章 点字の翻案	50
1. 手島精一と目賀田種太郎	50
2. 出会い	51
3. 3つの原案	52
4. 点字選定会議	54
5. 拗音の完成	56
6. 6字の名号	56
第5章 点字の実際	60
1. 仮名文字文化	60
2. 点字の仕組み	64

(1) 清音（五十音）	65
(2) 濁音および半濁音	66
(3) 拗音・拗濁音・拗半濁音	66
(4) 特殊音	67
(5) 数字とアルファベット	68
(6) 句読符	70
(7) 囲みの符号	71
(8) 線類の符号	72
(9) その他の符号	73
3. 点字の仮名遣い	75
(1) 助詞の「ハ」・「ヘ」	75
(2) 促音・長音	76
(3) 連濁・連呼	77
(4) 外来語や擬声語・擬態語	78
4. 数字および数を含む言葉	79
(1) 数字の書き方	79
(2) 数字に続けて書く言葉	80
(3) 固有名詞や慣用句など	81
5. アルファベットを含む言葉	83
(1) アルファベットの書き方	83
(2) アルファベットを含む言葉	83
6. 点字の分かち書き	85
(1) 文節分かち書き	85
(2) 接頭語および接尾語	86
(3) 形式名詞と補助用言	87
(4) 文節内の切れ続き	88
(5) 意味と拍による文節内の切れ続き	89
(6) 不自然な切れ続き	91
(7) 動詞「する」の切れ続き	92
(8) 複合動詞や複合形容詞	94
(9) 連濁を生ずる場合	94
(10) 漢字1字ずつが対等な関係で並んでいる場合	95
(11) 繰り返し言葉	95
(12) 固有名詞	95

第6章 分かち書きの原則 97

1. 言葉の階層構造と点字	97
2. 分かち書きの必要性	97

3. 具体例	98
4. 簡便な文節判断法	99
5. 助詞と助動詞	99
6. 文節の形	100
7. 文節の役割	101
8. 形式名詞	102
9. 補助用言	102
10. 連用修飾節と用言	103
11. 接頭語、接尾語、造語要素	103
12. 複合名詞の切れ続き	104
13. 漢字の表意性と表音性	105

第7章 点字表記の変遷 107

1. 中村京太郎と表音表記	107
2. 表音表記への流れ	108
3. 3つの点字規則	109
4. 1枚の資料を求めて	112
5. 日本点字研究会成立の背景	113
6. 日本点字研究会の成立	114
7. 『点字文法』	115
8. 『点字文法』に込められた願い	115
9. 全日盲研と日盲社協	116
10. 日本点字委員会の発足	117
11. 日点委の性格	118
(1) 目的	118
(2) 委員	118
(3) 事業	118
12. 『日本点字表記法（現代語篇）』の出版をめぐって	119
13. 近畿点字研究会の発足	122
14. 表記法改訂を目指して	123
15. 『日本点字表記法1990年版』	124
16. 『日本点字表記法2001年版』	127
17. その他の点字表記	129
(1) 試験問題表記について	129
(2) 理数記号について	129

第8章 点字の触読 132

1. 感覚機能	132
---------	-----

2. 感覚の種類	132
3. 皮膚感覚	133
4. 触圧覚	134
5. 点字触読のメカニズム	136
6. 点の高さ（1つの実験）	139
7. 片手読みと両手読み	141
8. 文字読みから文節読みへ	144
9. 点字の読み速度	144
10. 私の点字触読指導法	146

第9章 点字図書館	150
1. 点字図書館とは	150
2. 日本点字図書館の創立者 本間一夫	151
3. 点訳奉仕運動	155
4. 点訳奉仕運動の広がり	156
5. 増加する点字図書館	158
6. 日本点字図書館の歩み	160
(1) 法人格の取得	160
(2) 焼失した館の再建	161
(3) テープライブラリーの開設	162
(4) 点字教室の新設	163
(5) 盲人用具部の併設	164
7. 点字図書館の先駆	164
(1) 東京盲学校附属図書館	165
(2) 名古屋市立図書館点字文庫	166
(3) 日本ライトハウス点字図書館	167
(4) 東京盲学校同窓会（桜雲会）	167
(5) その他の点字図書館	168
8. 全国視覚障害者情報提供施設協会（全視情協）	168

第10章 戦前における点字の出版事業	171
1. ホールと仲村豊次郎	171
2. 我が国最初の点字印刷	172
3. 米国聖書会社	172
4. 桜雲会	173
5. ブライユ社	175
6. 点字週刊新聞「あけぼの」	176
7. 山岡熊次の国語教科書	178

8. 川越源治と大貫伊太郎	179
9. 再び「あけぼの」	180
10. 雑誌「信光」	180
11. 光の家	181
12. 「ひかりの園」	182
13. 小浜伊次郎と中学講義録	182
14. 伊達勝芳と江村悌三	183
15. 弘誓社	183
16. 日本点字社	184
17. 大阪点字毎日	185
18. 点字東洋日刊新聞	186
19. 日本ライトハウス	188
20. 斎藤武弥と夫人百合の働き	189
21. 東京点字出版所	190
22. 平井点字社	191
23. 点字聖書の出版	191
24. 我が国における点字出版の特徴	193
25. 東京ヘレン・ケラー協会 点字出版局	194

第11章 点字の市民権の拡大	197
1. 点字による盲教育の発展	197
2. 点字投票	198
3. 大学の門戸開放	200
4. 各種の資格試験	201
5. 点字技能師	202
6. 暮らしの中の点字	203
7. 街に見られる点字	205
8. 点字 J I S 規格	206

第12章 点訳奉仕運動	208
1. 代表的ボランティア活動	208
2. アメリカの点字図書館を見学して	209
3. 点訳ボランティアを志す人々	211
その1「点字を始めたきっかけ」	212
その2「目の不自由な夫婦との出会いから」	214
その3「短歌を書いてみました」	216
その4「数学の参考書を」	219
その5「点訳教室で1年間学んで」	223

はじめに

1980年代に点訳ソフトが開発され、パソコン点訳が可能になった。パソコン点訳では何部でも複製ができるので、点字の世界に一大革命をもたらすことになった。それまで点訳は点字盤か、点字タイプライターで行われていた。点字盤や点字タイプライターによって点訳されたものは複製ができないので、ただ1冊存在するのみであった。だから大量に供給しようと思えば、点字出版に頼る他なかった。そこに点字出版の大きい意義もあったのである。

欧米諸国においては、最初から国民やあるいは福祉を支える民間の資金によって、点字出版や点字図書館事業が行われてきた。しかし我が国ではそれとは事情を異にし、点字に関する事業に公費などが用いられることはほとんどなかった。点字出版事業も、点字図書館事業も、零細な資金で失明者自らの手によって行われ、我が国独特の発展を遂げてきたのである。しかし彼らはほとんど記録を残していない。

パソコン点訳の実現によって、点字による読書環境は改善され、点字は市民権を得て、発展の道をたどっている。しかし点字発達史揺籃期に活躍した先覚者の業績は、歴史の彼方に埋没しようとしている。それは大変残念なことと言わなくてはならない。

私は80年間点字とともに歩んできて、多くの先輩にも接する機会があったし、見聞きしてきたことも少なくない。そこで、わたしにできる限りにおいて、今や忘れ去られようとしている、我が国点字発達史揺籃期の姿を書き残しておきたいと考えた。それが本書の第一の目的である。

1890（明治23）年、石川倉次によって点字の日本語本案が行われてから、すでに120年が経過する。その間に、仮名文字体系の点字で日本語をどのように表記すれば最も読みやすく理解しやすいものになるか、そうしたテーマで多くの研究がなされてきた。初期の段階においては、主として個人的研究が行われていたが、のちには研究団体が結成され、組織的研究が行われるようになった。そうした表記法の変遷についても記しておきたいと考えた。それが第二の目的である。

そのようにして表記法が確立されても、それを実践してくださる人がなければ宝の持ち腐れになってしまう。幸い我が国には点訳ボランティアを志してくださる方が多く存在し、各地で点訳講習会が開催され、点訳ボランティアのサークルなども結成されるようになってきている。点訳ボランティアの方々がどんなきっかけで点字に近付き、どんな思いで点訳に携わっていてくださるか、点訳者自らの言葉でそうした思いを語って欲しかった。それらを収録しておきたいというのが第三の目的である。

点字は最初失明者間の情報交換に用いられるにすぎなかった。しかし次第に市民権を得て、失明者の社会参加になくてはならないものになってきた。点字によって各種の資格試験に挑戦することもできるようになってきたし、義務教育でも点字を教材として取り上げるようになってきている。公共の場所には点字表示が多く見られるようになって、失明者の行動に役立っているし、希望すれば行政からの通知などにも点字が使用されるようになってきている。このような点字の市民権の拡大についても記しておきたいと思った。それが第四の目的である。

私は仕事においても、また日常生活においても、点字の恩恵を多く受けてきた。そんな世界のあることを、一人でも多くの人に知って頂きたいと思って執筆に取りかかったのが本書である。もし誰かに本書を読んで頂き、点字に関心を持って頂くことができれば、私としては幸甚の至りである。

2012年1月吉日

阿佐 博

第1章 点字以前

1. ヨーロッパの塙保己一

点字の考案によって、視覚障害者の近代的教育が可能になったと言われている。しかし点字以前の江戸時代に、我が国に塙保己一が存在したように、ヨーロッパにも幾人もの盲目の学者が現れている。十指に余るそうした人々の中から、大学教授にまで上げられた2人についてのみ記してみたいと思う。

その1人はアレキサンドリアのディディムス (Didymus of Alexandria 308~398) である。彼は4、5歳の時失明したと言われるが、剛毅の精神に富み、ひたすら勉学にいそしむことを忘れなかった。その方法としていちいちのアルファベットの文字を木片に刻し、これを結合して語を綴り、文を成し、読書の用にも供したという。しかし、このような方法で能率を上げることは非常に困難なことは言うまでもなく、研究の大部分は、人に読んでもらって聞くこと、すなわち現在行なわれている対面朗読によって行なわれたものと思われる。最初神学者としての道を歩んだが、後にはアレキサンドリア大学の教授に上げられ、その学職は神学のみにとどまらず、哲学・数学・音楽および天文学にまで及んだ。4世紀にすでにこのような盲目の学者の出現をみていたのである。

他の1人はニコラス・サンダーソン (Nicholas Saunderson 1682~1739) である。彼は生後11か月にして失明したが、学問を好み、特に数学に秀でていた。アイザック・ニュートンの推薦によって、ケンブリッジ大学の数学教授に就任していることをみても、その天才ぶりを偲ぶことができる。

2. サンダーソンの計算盤

サンダーソンは計算盤と言われるものを開発した。そのために、彼はまず数字を書き表す方法を考えた。それは縦横3つずつの穴を穿った正方形の小さな板と、大小2種の栓から成るものである。その穴に栓を差し込むことによって、数字を表したのである。穴にはそれぞれ名称が与えられて

おり、中央にあるものをIとし、その周辺の8つの穴は上部の中央にあるものをAとしてそれから右回りにB、C～Hと呼ぶことにした。2種類の栓は長さは等しいものであったが、その頭に大小の差をつけ、これを大栓および小栓と呼んだ。そして大栓は中央のIにのみ用い、小栓は9つの穴いずれにも用いることにして数字を表したのである。例えば中心Iに大栓のみを立てれば0を表し、小栓を立てれば1を表した。また、Iに大栓を、Aに小栓を立てれば2を、同様にBに小栓を立てれば3を表し、このようにしてHに小栓を立てれば9を表すことにしたのである。こうして0と1から9までを表現したのであった。

この数字を表した板を作業ができるように、一定の間隔をもって配列できるようにした装置が「サンダーソンの計算盤」なのである。その後も何種類かの計算盤が開発されているが、多くはこのサンダーソンの計算盤を改良したものであった。

この改良の到達点がウィリアム・テラー (William Taylor ～1870) の計算盤であったと私は思っている。このテラーの計算盤は我が国にも輸入されて、昭和初期には実際に教具として使われていた。昭和10年頃、私は、徳島の盲学校で、このテラー計算盤によって算術の授業を受けたのである。

テラー計算盤も盤と栓から構成されている。盤には横に約40、縦に約20の8角の星形の小さな穴が開いている。これに方形の栓を差し込むのである。その栓には方形の1辺に沿って、両端に突起が付いており、その突起は一端のものはただ方形の1辺が伸びた形になっていたが、他端のものはその中ほどに切れ込みが付けてあった。穴が8角形になっていたので、栓を挿すときこの突起を右上・右・右下・下・左下・左・左上・上の8方向に向けることができる。その向きによって1から8までの数字を表すことができたのである。またその栓を逆に挿すと、切れ込みの入った突起も8方向に向けることができ、それで9と0および $+$ ・ $-$ ・ $\times$ ・ $\div$ ・ $\cdot$ (小数点)・ $=$ などの記号を表すことができた。この栓を挿すことは、紙の上に数字を書き並べる形になるので、これで $12+25$ とか、 3.2×5 というような式を書くこともでき、また筆算形式で四則の計算もできたのである。さらに

両端の突起の形を変えることによって、代数記号としても用いることができた。

私は今でもテーラー計算盤は便利なものであったと思っている。それがなぜ使われなくなったのか、その理由が分からない。1つには算盤の存在ということが考えられる。失明者用算盤は幾種類も開発されている。よく知られているものに東京盲学校で開発した「舌型算盤」や、京都盲学校で開発した「半珠算盤」などがある。東西を代表する盲学校でそれぞれ算盤を開発し、その使用を奨励したので、算盤が主流となり、テーラー計算盤が忘れられたのかもしれない。たしかに四則の計算なら算盤の方が速い。しかしテーラー計算盤は式を書くこともできるし、筆算同様の形式で四則の計算をすることもできる。盲学校の教具からテーラー計算盤が姿を消したのは惜しいことであったと、私は今も思っている。

3. バランタン・アウイの凸字

凸字とは、紙面に文字の形を浮き出させたもので、開発者はバランタン・アウイ (Valentin Haüy 1745～1822) である。彼は1784年パリに盲学校を開設して、世界で最初に組織的盲教育に着手した人である。彼の青年時代と言えば、18世紀も半ばを過ぎ、ヴォルテール、ディデロ、ルソーなどの傑出した思想家が現れ、封建社会に自由平等の思想が芽生えようとする頃であった。アウイもこれらの思想家から強い影響を受けた1人である。

当時失明者は哀れな存在であった。一般には街に出て人々の同情を買い、金銭を恵んでもらう以外に生きる道を持たなかった。また、興行師の親方に率いられて、衣服も帽子も異様な格好で街角に立たされ、道行く人々の笑いに供され、恵みの金銭を得るために利用されている一団もあった。彼らはもちろん教育を受けることもなく、無知そのものの姿というほかはなかった。アウイもかつてはそれらを楽しんで見る見物者の1人だったのである。

だがある時、突然彼の人道主義が目覚めた。目前の光景に深い悲しみと憤りを覚え、その暴虐が許せなくなったのである。その時彼の心に浮かんだのが彼らの教育ということであった。

教育には文字が必要である。しかもその文字は触覚に訴えるものでなくてはならない。そう考えていた時、偶然にも2つのヒントに出会うのである。

その1は、ある盲目の少年との出会いである。彼は街角で遭遇したその少年に、高額な貨幣を与えた。するとその少年はアウイを呼びとめ、「これは間違いではないか」と尋ねたのである。彼が常に手にしていたのは最も少額の貨幣だったのである。アウイはその少年の正直さに感動するとともに、瞬間に貨幣の大小を識別し得る触覚の鋭敏さにも驚いたのであった。

実は今日も視覚障害者は皆、その大小や形状によって貨幣の額を識別している。普通に行なわれていることで、何ら驚くにはあたらないのであるが、当時は視覚障害者に対する認識がその程度のものであったのだろう。アウイも失明者は神秘的な触覚の能力を持っていると考えたようである。

その2は、実際に文字に触れてそれを読む姿を目の当たりにしたことである。彼は盲学校開設前に1人の盲少年を家におき、盲教育の可能性について研究していた。ある時、彼のもとに1通の招待状が届いた。それは厚いカードに印刷されたもので、裏面に活字の跡が浮き彫りになっていた。机上に置いてあったそのカードを手にしたかの少年が、指先でその文字を読んだのである。それはアウイにとっての大発見であった。文字を読み得るということは教育の可能性を示唆することでもある。そしてそれが凸字開発の大きいヒントともなり、盲学校開設の決意を促すことにもなったのであった。

彼は盲学校開設に先立ち、まず凸字の本の製作に着手した。それは特別の活字を作り、それに濡れた紙を押し当てることによって文字を浮き出させたものである。こうして最初の凸字印刷に挑戦したのであった。その後も字形や文字の大小について読みやすさの検討を重ね、彼が教育上使用したのは曲線的のイタリックに似た文字であった。かくしてアウイの凸字は1854年、点字が正式に採用されるまで、パリ盲学校において教育用文字として、半世紀余にわたって使用されたのであった。

4. ムーンタイプ

アウイの凸字は、最初フランス以外の国へ普及することはなかった。開発後約40年を経て1823年、盲目の子供を持つ英国の1人の婦人がこれに着目し、持ち帰ってから広く知られるようになったのである。

それ以後、英国では凸字に関する関心が高まり、その研究や実験が行なわれるようになった。フランスにおいてはパリ盲学校以外で凸字出版が行なわれることもなく、またこれについて活発な議論が起こることもなかった。アウイをその道の権威として仰ぎ、批判を試みる者がなかったものと思われる。それに対して英国では有識団体による懸賞募集なども行なわれ、活発な論議が展開されたのである。

最初の懸賞募集は、1830年、ロンドン芸術協会によって行なわれた。これには6名の応募があった。もちろん1人の優秀作品が選ばれたが、直ちにそれを採用するのではなく、さらに完璧を期するために広く社会に呼びかけ、1836年、金杯を懸けて再度募集が行なわれたのである。この再募集にあたっては、触覚による認識を容易にするために字形のほかに、紙面から浮き出させる高さまで求められている。そればかりでなく、印刷も容易でかつ廉価であるという条件までつけられたのであった。これには15件の応募があった。字形に関してはローマ字を基本とするものと、ローマ字の形を無視して作者任意の構成によるものとがあった。これらは後に「ローマ字形式」および「自由形式」と分類されるようになるが、15件のうち、ローマ字形式が3件だったのに対し、自由形式は12件にも及んだのである。だが金杯を得たのは、エドモンド・フライ (Edmund Fry) のローマ字形式によるもので、大文字を基本としたものであった。ローマ字形式が選ばれた理由は、視覚障害者も普通の文字を認識すべきだという考えに基づいたもので、それはアウイの思想とも一致するものであった。

懸賞募集はロンドン芸術協会のほかにエディンバラ芸術協会などでも行なわれた。

このようにして懸賞募集が行なわれたが、最優秀とされたフライのタイプに統一することはできなかった。応募者の中には印刷を業とする者や養育院（失明者を収容し教育する所）の教師もあり、賞には入らなくても自

ら考案した字形によって教育したり、出版を行なったりする者があったからである。かくしておおむね5タイプの凸字が流通することになるのである。

その1は、ゴールタイプ (Gall's Type) と呼ばれるものである。ローマ字の小文字を角形に変形したもので、開発者はジェームス・ゴール (James Gall) である。彼も懸賞募集に応募した1人であった。選には漏れたが、彼は自ら開発した文字の優秀性を信じていた。応募以前1834年、すでにそのタイプの文字で新約聖書の『ヨハネ福音書』を出版したりもしていたのである。もともと印刷を業とする人だったので、独力でそのような事業を成し遂げることができたものと思われる。

彼はその文字をもってエディンバラの養育院で教育することを求め、それが許可されている。こうしてゴールタイプは流通することとなるのである。

その2は、アルストンタイプ (Alston's Type) である。ローマ字の大文字を基本としたもので、開発者は、ジョン・アルストン (John Alston) である。

彼はグラスゴー養育院の経営者の1人で、最初フライの形式を採用したのであったが、そのままでは触覚に適さないことに気づき、文字の形を縮小して、独自のタイプを開発したのである。

彼は特別に基金を求め、1837年から聖書の印刷に着手し、40年までにそれを完結した。こうして多数の養育院で彼の文字が採用されることになるのである。

その3は、リューカスタイプ (Lucas's Type) である。ある種の速記文字を基本とした自由形式に属するものである。開発者は、トーマス・リューカス (Thomas M. Lucas) であった。1830年イングランドのブリストルに盲学校を開設した人でもある。

彼は触覚に訴える文字はできる限り省略し、単純化されたものでなければならないという信念を持っていた。そこで速記文字を基本として、直線と曲線および点から成る文字を開発したのである。しかも前置詞・接続詞などの従属語は多くの場合その頭文字をもって表し、その他可能な場合は

1字をもって1語を表現するという方法をも編み出した。後に点字の略字や縮字のヒントにもなったものである。

彼は自ら開発した文字は失明者用文字として最も優れたものと自任していた。したがって確信と熱心とをもって、その普及宣伝に努めたのである。

そのために彼は3つの目標を立てていた。(1) 中央都市に盲学校を設立すること、(2) その分校の設立、(3) 書物の印刷および普及、というものである。この事業は彼の継承者らによって遂行され、1842年には聖書出版の事業を完成している。

その4は、フリーアタイプ (Frere's Type) である。自由形式に属し、やはり一種の速記文字を改良したもので、直線・丸・半円・直角・鋭角から構成されていた。この5つの要素で33の字形を作り、これを英語の諸々の発音に充当したのである。つまり表音的表記であった。また略字も使用した。その場合省略された母音を気づかせる12の法則を立てた。しかしこれは複雑すぎて理解に困難であったと言われる。開発者はジェームス・フリーア (James Hatley Frere 1779~1866) で、彼自身盲目であった。

彼も自ら開発した文字で、1839年から51年までに聖書全文を印刷している。触覚的には分かりやすいものであったが、規則が複雑なことと句読点がなかったことが大きい欠点だったと言われている。

その5は、ムーンタイプ (Moon's Type) である。自由形式ではあるが、ローマ字にわずかに似たところもあると言われ、後世、凸字としては最も優れたものとの評価を受けた。点字が使用されるようになってからも、点字と併用されて生き残ったのは、このタイプだけであり、そのことによってもその優秀性を知ることができる。開発者はウィリアム・ムーン (William Moon 1818~1894) である。

ムーンは、4歳の時猩紅熱のために失明した。1830年代以降、英国では諸形式の凸字が流通し、各形式によって聖書などが出版された。1830年代から点字が採用されるまでの約30年間は、各形式の凸字が並び立ち競い合っており、まさに百花繚乱の観を呈したが、他方それは隆盛の中の混沌とも言わざるを得なかった。ムーンの成長期はそんな時代に当たっていたのであ

る。したがってせっかく一形式の凸字に習熟しても、他の形式で出版されたものを読むことができないという矛盾に満ちた時代でもあったのだ。

彼が習得したのはフリーアタイプであった。強固な意思と熱心とをもって勉学に励み、やがて学者としても名声を博するに至るのである。彼は我が家を開放して失明児の教育をも行ない、やがてそれが発展して、ブライトン養育院として知られるようになるのである。

彼は教育の過程においてフリーアタイプの欠点に気づく。そこで一層触知しやすく合理的な文字の研究に着手し、その結果到達したのがムーンタイプだったのである。その誕生は1847年のことであった。

5. ボストンタイプ

1830年代に至り、アメリカでも凸字書の出版が行なわれるようになっていく。1833年、フィラデルフィアに設立されたペンシルバニア盲学校において、『マルコによる福音書』を出版したのがその最初のものだと言われている。字形はアルストンタイプをやや変形したもので、ペンシルバニアタイプと呼ばれた。

また、ボストンのパーキンス盲学校の創立者サムエル・ハウ (Samuel G. Howe) はヨーロッパ視察に赴き、各地の凸字やその印刷法などを見聞して1832年帰国した。帰国後ゴールタイプを参考にしてこれを改良した凸字を開発し、ボストンタイプ (Boston Type) と名づけた。このボストンタイプで1836年新約聖書を出版し、また1843年旧約聖書を出版した。

これらの他にも幾種類かの形式の凸字が開発されたが、1835年ニューヨーク盲学校で開催された「盲教育者会議」において、凸字の問題が議題に上り、ボストンタイプが認定されていたので、英国のような混乱を招くことはなかった。

6. クラインの針文字

針文字とは、活字の文字の部分の針状にし、これを紙に押し当てることによってその裏面に点線の文字が現れるように工夫されたものである。開発者はクライン (J. Johann W. Klein 1765～1826) である。

クラインは法律家を目指し、法学を学んだが、35歳の時法律上の職業を捨て、ウィーンにおいて福祉事業に献身するようになる。特に視覚障害者に同情を寄せ、1804年ウィーンに盲学校を開設し、教育者としても活躍することになるのである。

彼は教育の目的を職業的自立におき、普通教科のほかには職業教育として手工芸を取り入れた。この職業教育はやがて社会的評価を受けることになり、学校は1816年国立に移管されることになるのである。

彼は常に熱心な研究者でもあった。盲教育に関する幾多の論文を発表するとともに、教育法の改善にも努めたのである。最初アウイの凸字を用いていたが、やがて自ら考案した針文字を使用することになる。普通の凸字よりも点線文字のほうが触知しやすいことをも証明している。

クラインが針文字を考案するにあたって、1つのエピソードがあった。ある時在学している生徒の1人が郷里の母からの手紙を受け取るのである。その手紙は針で紙に点を打ち出し、その点の連続によって文字をかたどったものであった。クラインはそのことに感動するとともに、点線は触覚に適することをも知ったのであった。こうしたヒントがあって開発されたのが針文字である。針文字開発の裏面には、1人の母親の熱い愛情が秘められていたのであった。

7. 針線凸字

針文字は我が国の盲教育にも取り入れられている。我が国に盲教育の議論が起こったのは1875（明治8）年のことで、有識者によって「^{らくぜんかい}楽善会」が結成されたのであった。5年の準備の後、1880（明治13）年「楽善会訓盲院」が開設され、凸字の教育が行なわれたが、間もなく針文字も使用されることになるのである。クラインの針文字に倣ったものであるが、その活字は訓盲院自ら製作したものであった。我が国ではこれを「針線凸字」と称し、その活字は鉛の台に針を植えることによって作られた。字体は平仮名であった。羅紗のような厚手の布の上に紙を置き、その上に罫枠を載せ、罫を辿ってこの活字を用いて文字を押し刻したのである。点字採用以前の一時期、視覚障害者が自ら読み書きできる文字として用いられたのであ

った。この針線凸字の活字が、筑波大学附属視覚特別支援学校の資料室に今日も保存されている。

8. 結び文字

結び文字とは紐を結び、その結び目の形、大きさおよび位置によってアルファベットの文字を表すものである。その原理は簡単で、まずアルファベット26文字を7グループに分ける。そうすれば1グループは4文字となり、最後の7グループのみが2文字となる。紐に比較的大きい結び目を作って、それをこれら7グループを代表する主字とする。だから主字には7種類の異なった結び方が必要になる。これとともに小さい結び目を作ってそれを副字とするが、主字と副字との距離によって文字を表すので副字は1種類のみで足りる。

例えば第1グループのaからdでは、大きい丸い結び目を作ってこれを主字とする。主字のみ存在すればaを表し、副字が主字に近接していればbを、2分の1インチ離れていればcを、1インチ離れていればdを表すのである。同様にして26文字を表現するのである。したがって問題なのは7種類の主字を作ることである。同じ丸い結び目であっても大きさを変えたり、やや細長くしたり、中にくびれを作って瓢箪型にしたり、主字の結び方には苦心したようである。

昔アンデス地方のインディアンのある種族が、紐を結ぶという文化を持っていた。文字に代わるものとして、記録や通信に用いていたのである。結び文字はそれをヒントにして開発されたのであった。

紐は回転枠に巻いてあり、読むに従ってほどこいていくのである。これを読むのは大変な努力であったと思われるが、17世紀頃英国では結び文字によって聖書や賛美歌が作られていた。ニューカッスルの養育院において、1人の失明女性が結び文字を読んでいたという記録が残っているとのことである。

9. 楽善会

我が国の盲教育史上、楽善会を等閑視することはできない。組織的盲教

育について、初めて立案した組織だからである。当時の有識者6人によって発起され、最初の委員会は、明治8年5月22日、築地のホールズ宅において開催された。発起人として名を連ねたのは、古川正雄^{つだ せん}、津田仙^{まさ}、中村正直^{なお さんこう}、岸田吟香、ボルシャルト（Dr. Burchardt）およびヘンリー・ホールズ（Dr. Henry Faulds）の諸氏であつた。まずこれら6人のプロフィールについて記しておきたいと思う。

古川正雄は広島の人。大坂・緒方洪庵の塾に学び、福沢諭吉らと親しくなり、のち江戸に出てオランダ語の翻訳などを業としていたが、その後明治政府に入り、工部省の官吏となった。明治6年ウィーンにおいて開催された万国博覧会に出席して、主として教育方面の調査を行なった。

津田仙は旧佐倉藩に生まれ、蘭学塾に学び、のち英語を修め、幕府の文書取調方となり、翻訳の仕事にも携わっていた。慶応3年、軍艦注文使節の通訳としてアメリカに渡り、彼の地の文物に接して感動するとともに、合理的に行なわれている農業に心を打たれた。帰国後直ちに野に下り、明治2年、京橋に株式会社「築地ホテル」を開業した。我が国最初のホテルである。明治6年古川正雄らとともにウィーンの万国博覧会に赴き、ヨーロッパの農業を学び、帰国後直ちに『農業三事』の一書を著し、また麻布に学農社を興し、農学校を開設し、機関誌「農業雑誌」を発行してその後30年余にわたり、一意専心、農業の進歩改良に努力を重ねた。福祉の志厚く、キリスト教の信仰を持ち、中村正直、新島襄とともに、キリスト教の3傑と言われた。津田英学塾（後の津田塾大学）を創設した津田梅子の父でもある。

中村正直は江戸の生まれ、幕末・明治の洋学者・教育家。小石川区の犬曲に家塾を開き英語教育を行ない、慶応義塾と並び多くの英才を送り出した。また西周らとともに、我が国最初の学術団体「明六社」を興し、『明六雑誌』を発刊して、啓蒙思想の普及に努めた。

岸田吟香は岡山の人。17歳の時江戸に出て蘭学を学び、実業家として活躍した。慶応3年海運会社を興し、江戸横浜間に船便を運航したり、函館に製氷会社を創設したりしたことが知られている。一方、ヘボンの英和および和英辞書の編纂にも協力した。明治5年、友人と図って東京で日刊新

聞の発行を始めた。我が国最初の日刊新聞で、今日の毎日新聞につながるものである。東亜同文会を創設して日中文化交流にも尽力した。

ボルシャルトは独逸亜米利加ルセラン（Lutheran）教会の宣教師、中村正直の家塾の教師でもあった。

ヘンリー・ホールズはスコットランドの人、医師でもあった。宣教師として来日、築地病院を開設して診療をしながらキリスト教の布教に努めた。

私は楽善会の提唱者は、おそらくホールズであったと想像している。彼は診療や伝道を通して多くの日本人に接し、失明者の多いことに気づいたのであろう。英国においては凸字の聖書が出版され、それによって失明者の教育が行なわれ、優れた人物も育っている。そこで日本においても失明者の教育を行なうことを考え、他の有識者に呼びかけて、楽善会結成に至ったものと思うのである。

楽善会最初の仕事は、新約聖書『ヨハネ福音書』第9章の凸字印刷を、アメリカ聖書協会に注文したことであった。このヨハネ福音書9章は、失明者開眼の記事として知られたところである。楽善会構成メンバーに2人の宣教師と、津田仙および中村正直という熱心なクリスチャンのいたことを思えば、この措置も自然のこととして理解できるのである。

この注文に応じて、アメリカ聖書協会からは、日本語に訳された聖書の記事をヘボン式ローマ字で印刷したものが送られてきた。使用されたアルファベットはボストンタイプだったようである。私は学生時代に、母校の図書館でその実物を見たことがあった。『点字発達史』の著者大河原欽吾は、このことに関して「実にヨハネ福音書9章、盲人開眼の章は、また我が国盲教育開眼の章となった」という名文をもって記述しているが、まさにこの凸字聖書によって我が国の盲教育は開始されたのであった。

楽善会発足後その趣旨に賛同して入会協力する者も多く、資金も調って、築地に校舎を新築した。楽善会訓盲院として開校したのは明治13年のことであった。なお後に聾啞者も受け入れたので、「楽善会訓盲聾啞院」と呼ばれるようになっていた。

指導科目としては、習字、素読、講義、暗誦、数学、作文、音楽などが挙げられている。文字としては凸字が用いられ、点字の翻案が行なわれる

まで、我が国にも約10年、凸字教育の時代があったのである。

文字指導の方法としては、最初「木刻文字」と称し、板に文字を刻んだものを用いた。それを模索させることによってまず五十音の指導を行なうのである。文字の認識ができると、石筆・石盤を用いて実際に仮名文字を書く練習を行なった。それに上達すれば次第に漢字の練習に入り、偏、旁（つくり）等に進み、鉛筆を持って紙上に書く練習に進んだ。鈍尖鉄筆を持って紙上に押書させるようなこともあった。

凸字書として製作されたものには、『小学読本』、『言葉の掟』(高津柏樹^{はくじゅ}の著したもので、簡単な文法書)、その他『千字文』や、『吾孀箏譜』、『杉山三部書』などもあった。

『千字文』は、よく知られるように、中国の六朝時代に著され、我が国にも輸入されて習字の手本として用いられたものである。漢字の指導に使われたのであろうか。

また職業課程として、音楽や鍼按などの指導も行なわれていたので、『吾孀箏譜』や『杉山三部書』は、それらの教科用図書として用いられたことが想像されるが、どの程度読み得たものか、私は疑問に思っている。

このようにして楽善会訓盲院は運営されてきたのであったが、明治18年9月12日に開催された委員会において、会長より、「文部省へ出願して本省直轄の学校にしたい」との発議があり、委員一同異議なく、同月26日、総会を開いてこの件について審議することを申し合わせた。9月26日の総会においても、「現状においては永続することはできても発展は期し難い」との理由で、文部省に直轄願いを出すことが決議された。このようにして提出された出願が11月21日認可され、楽善会訓盲院は文部省の直轄学校として運営されることになったのである。官立東京盲啞学校の誕生である。ただし東京盲啞学校と改名されたのは2年後の明治20年のことであった。

明治19年1月には、東京女子師範学校（後の東京高等女子師範学校）教諭で、附属幼稚園主任でもあった小西信八が訓盲院係専務として派遣されたのである。点字を採用し、また第3代校長に就任して、数々の業績を残した人である。

10. 葛原勾当日記

葛原勾当（1812～1882）は備後国（現広島県）の人である。3歳の時天然痘のため失明するが、生田流の箏を学び、名を成した人である。盲目にもかかわらず、40年間にわたって日記を書き続けたことでも知られている。自ら案出した活字によってその日記は綴られたのであった。

活字はイロハおよび数字を主とし、これに少数の漢字を加えたものであった。彼はこれらの活字を7字詰め9行に配列し、1つの箱に収めていた。各活字には長方形の柄を付け、その左右の面に線を刻み、右側の線の数に配列における行の数を示し、左側の線の数に列を示すようにしたのである。こうすれば行と列との交差する所に定められた文字が存在することになる。この活字を使用するにあたっては2本の罫枠を用いた。罫枠を並べ、第1行を書き終わるとこれを第3行に移して、第2行を書く。このようにして順次行を進めていったので、まっすぐに書くことができたのである。このようにして1882（明治15）年に亡くなるまで40余年にわたって彼は日記を書き続けたのであった。

活字によって1字1字押印しながら書く文章がどんなに大変であったか、それは想像を絶するものであったろう。それを40余年にわたって続けたのである。その努力と意思の強さには驚くほかはない。しかもその日記には天候のことやその時代の出来事なども記されており、文化財としても価値のあるものだとのことである。

第2章 点字の開発

1. 点字の誕生

6点点字の考案者はルイ・ブライユ (Louis Braille 1809～1852) である。その考案にあたっては1つのエピソードがあった。

ルイがパリ盲学校に入学したのは1819年、10歳の時のことであるが、その頃不思議な文字を考案した人があった。フランスの砲兵大尉シャルル・バルビエ (Nicolas Marie Charles Barbier 1767～1841) である。その文字は縦6点、横2点の12点から構成され、指先の触覚で読むことを目的としたものであった。バルビエはこれに「夜の文字」と名づけ、1819年6月28日にフランス学士院にこの文字に関する報告書を提出している。どんなに暗い夜でも光を必要としないで、情報を密かに伝えることができるようにと、軍事用に開発されたものであったが、その解説書には「この方法は聾者と失明者との間の通信を可能にする」との説明もついていた。

彼はこの文字を考案して間もなく、工業博物館で目の不自由な子供たちが本を読む姿を見た。大きなページに大きな凸字で印刷されたものを指先で読むのであるが、指の運びは遅く、読み方もきわめてたどたどしいものであった。それを見てバルビエは、自分の考案した「夜の文字」が失明者に役立つのではないかと考えた。彼はさらに研究を重ね、改良を加えて、これにソノグラフィー (一種の音標文字) と命名し、どんな文でも書けるようにしたのである。しかしその名の通りその文字はフランス語の音を表すものであって、普通のアルファベットを表すものではなかった。したがってすべての単語を音標文字的に書かなければならず、多くの点の複雑な組み合わせを要した。1820年の終わりに近く、彼はその文字を携えて、ルイの在学しているパリ盲学校にギーエ校長を訪ねた。

彼は、この発明は歓迎され、直ちに採用されるだろうと予測していた。だから自ら製作した定規 (点字を書くための器具) さえ携えてきていた。しかしギーエ校長は慎重であった。「それを採用するには実験を試みなければならない。そして実際に使ってみることによって評価しなければならない」

ない」というのがギーエの意見で、バルビエの期待は裏切られたのであった。公の承認を得なかったバルビエは、その日少し失望して帰らなければならなかった。しかしバルビエの意思は強固で、その文字をさらに改良して再び盲学校を訪問しようと心に誓うのである。

だがこの実験は、ギーエ校長の下で行なわれることはなかった。翌1821年の初めにギーエは退職してしまったからである。したがって1821年4月11日にバルビエの再度の訪問を受けたのは、次に就任したピニエ校長であった。ピニエは前任者よりは積極的で、それを受け入れて採用してみることが約束した。

バルビエの訪問の数日後に、ピニエ校長は彼との約束を実行に移すことにした。その日、教師や生徒や寮母たちを1室に呼び集めた。広い部屋に集められた60名ばかりの前で、ソノグラフィーの発明の過程を話し、バルビエが残していった数枚の見本を彼らの間に回したのである。

点の組み合わせによって構成された文字は、従来の凸字に比べてはるかに触覚的に優れたものであることは誰にも容易に理解することができた。この文字に自分の指で触れたとき、ルイ・ブライユの顔はおそらく喜びに輝いたことであろう。先生や寮母や他の生徒たちも非常に興味を示し、小さなグループを作っていろいろと論じ合った。ある者は、これはあまりにも複雑すぎると主張したが、多くの者はこの不思議な文字を支持して、この方法を採用すべきであるという意見だった。次の週にバルビエはピニエ校長から「ソノグラフィーは盲学校において、補助教材として採用されるだろう」との手紙を受け取っている。

生徒たちは早くこの新しい方法を習得したいと思って練習を始めた。何よりもうれしかったのは、自分で文字が書けるということであった。バルビエが考案した定規（点字を書くための器具）は簡単で、よく考えられたものだった。まず点を受けるための金属板があり、これには横に長い6本の浅い溝が同じ間隔で刻まれていた。金属板には長方形の枠の付いたクリップがセットされており、クリップは板に沿って左右に移動するようになっていた。それを使えば定規の溝に沿って正しい位置に点を打つことができるように工夫されていたのである。点を打つためには、細く尖った金属

棒に大きな丸い柄の付いた点筆が用意されていた。定規に紙を当て、クリップの枠を使ってこの点筆で点を打ち出す仕組みになっていたのである。

生徒たちはこのバルビエの方法で、熱心に読んだり書いたりした。もちろんルイと彼の親友ゴーティエも練習に励み、おたがいに手紙を交換して読み書きの上達に努めた。こうして彼らは、ソノグラフィーの扱いに次第に習熟していったのである。ピニエ校長は同年10月30日付けの手紙で「生徒たちは休暇から帰ってきました。そしてあなたの『夜の文字』を再び練習しています。数名の熱心な生徒の努力が、あなたを失望させないであろうことをお知らせしておきたいと思います」とバルビエに伝えている。その熱心な生徒の1人が12歳のルイ・ブライユであったことは言うまでもなからう。

ところが、時が過ぎてソノグラフィーの取り扱いの能力がだんだん進歩するにつれて、ルイはその文字には大きい欠点のあることに気づくのである。まず第1にソノグラフィーでは音の集まりとしての言葉を記号で表すだけで、アルファベットで綴ることができないし、句読点を使うこともできなかった。バルビエの文字には句読点を表すものがなかったのである。そのほか数字も楽譜もなかった。だから数式を書くこともできないし、楽譜を書くこともできなかった。たしかに凸字よりは読みやすいものであったし、自分で書くことができるという利点はあったが、文字としてはまだ不完全なものだったのである。そればかりでなく、縦6点というのは指先の触覚の限界を超えるものだったし、点の組み合わせの複雑さが読むことを非常に困難にしていた。それでルイはこの方法に改良を加えることを考えるようになるのである。

彼はどうしてもアルファベットやアクセント記号や句読点や数学記号や楽譜なども表すことができるものでなければならぬと考えた。アクセント記号は母音の長短などを示す記号で、フランス語の綴りにおいては不可欠のものである。またバルビエの文字は、12点が基本になっているが、点の数ももうすこし少なくしたかった。そこで6本の横線と枠からできているバルビエの定規をバンドで2つに仕切って、3本の横線とし、縦3点、横2点の6つの点の組み合わせによって目的を達することができないかと

考え始めたのである。

そのことを知ったピニエ校長は、そうした事情をバルビエに伝えた。彼は、自分が長い間探求してきた問題に対して、1人の盲学生が変更を加えようとしていることを知って大変驚き、さっそくその生徒に会うために学校へ急いだのであった。そこで紹介されたのが、痩せた青白い金髪の少年だったのである。ルイは、ソノグラフィーが盲人用文字として欠点のあることや、彼の考えている改良点などについて話した。バルビエはルイの考えの幾つかにはうなずくことができたが、自分の多年の研究に半ズボンの小さい少年が反論していることに我慢ができなかった。55歳の陸軍大尉は、自分の発明の意義と価値を挙げて大声で弁護したので、ルイは恐れてなんにも言うことができなくなってしまった。バルビエも目の不自由な子供たちのために考えてはいたが、それでもルイが考えているような複雑な方法が目の不自由な者に必要だとは信じられなかったのである。文学や科学の世界を知りたい、ものを読み考えを深め、それを書いて多くの人々に伝えたい、そのための手段が欲しいという失明者の強い望みが、残念ながらバルビエには理解できなかったのである。このときバルビエに会ってからルイ・ブライユの真に創造的な仕事が始まるのである。

ルイは時間を惜しんで研究に励んだ。特に仲間が寝静まった夜、定規と点筆を取り出して、熱心に計算と実験に取り組んだ。学校が休暇に入るたびに郷里へ帰って、その自由な時間をすべて研究のために費やした。学校で眠る時間も惜しんで研究に耽っていたので、健康も損なわれがちであったが、田舎の新鮮な空気は、彼に新しい活力を与えてくれた。彼は家を出て坂道の外れに腰を下ろして、忍耐強く6点によるアルファベットを組み立てながら何時間も過ごすのが常だった。通りすがりの村人たちはその姿を見て、「ルイがピンで紙に穴を開けている。なんという奇妙な遊びだろう」とささやきあったとのことである。そして1824年、ルイが15歳になった頃には、彼の研究はほとんど完成に近づいていた。縦3点、横2点の6点を組み合わせることによって、アルファベットをはじめ、アクセント記号、句読符、数学記号や楽譜まで表すことに成功していたのである。

ルイの考案した方法に特に関心を示したのは、最初にソノグラフィーの

実験を共にしたゴーティエであった。実はゴーティエも新しい方法を考えていたのであったが、ルイの研究の優れていることを認めて、その方法を受け入れることにしたのである。ゴーティエはこの方式を他の友達にも話さずにはいられなかった。たちまち集まってきた生徒たちに囲まれて、ルイは驚くほどの速さで文を正確に書いて見せた。こうしてブライユ式点字が全校に広まっていったのである。

このことを知ったピニエは、ルイを校長室に呼んだ。そこで彼は自ら考案した方法を校長の前で実演して見せたのである。その簡単な仕組みと文を書く速さに、ピニエは自分の目を疑うほどであったという。校長の賞賛を受けてルイは幸福であった。しかし彼はなお細かい部分で幾つか検討しなければならない問題のあることを校長に告げたのであった。

生徒たちはすぐにルイの方法をマスターした。ピニエ校長は、生徒たちの熱心さと覚えの速さに感動して、バルビエの定規をルイの方法に合うように改造してくれた。動かせるクリップの枠を2つに分けて、それぞれにルイ・ブライユ方式の6点が打てるようにしたのである。ピニエのこの英断によって生徒たちはたやすくノートを取ったり、手紙を出し合ったり、日記をつけたりすることができるようになったのである。こうして今日世界各国で使われている6点点字の原型が定まったのであった。1825年、ルイ・ブライユ16歳の時のことであった。

ルイは1828年、卒業と同時に母校の見習い教員として採用された。彼の生活は多忙なものとなったが、ますます点字の研究と実験に励んだ。その最初の成果が楽譜の表記に見られ、音符の前にオクターブ記号を割り当てることによって、7つの異なったオクターブを書き分けることに成功したのである。また1829年には『言葉と音符と簡単な歌曲を失明者のために点字で書き表す方法』の初版を出版した。32ページのこの本は、彼が点字について公に発表した最初の解説書であった。序文に彼はバルビエのことに触れ、「このような点字が生まれるヒントを与えてくれたシャルル・バルビエに敬意を表する」と記している。

彼は謙遜であった。自分の考案した点字によって名声を得たいとは思わなかった。いつも仲間の生活環境が改善されることを自らの幸せとしてい

たのである。

点字の起源については2つの考え方が定着している。この解説書が出版された1829年とする説と、事実上6点点字が完成した1825年とする説である。点字考案100周年記念の国際行事は、前者を採って1929年に行なわれたし、同150年の記念行事は、後者を採って1975年に行なわれたのであった。

ルイは1832年に、『アジア地理』と『フランス地理』の2冊の本を点字で出版した。これらは現在もパリのバランタン・アウイ博物館に保存されているとのことである。

文字は読みやすいばかりでなく、書きやすくもなくてはならない。ブライユの点字システムはその双方の条件を満たしていたので、生徒間では大変好評であった。ピニエ校長もまたそれに好意的で、生徒にも個人的にはそれを使うことを勧めていた。だが公の教育の場に取り入れることについては、まだ外部の抵抗が強かった。「失明者も一般の人と同じ文字を使うべきで、特別の文字を使うことは失明者の差別につながる」という固定観念があり、それはまたアウイの思想でもあった。殊に晴眼者の教師の中にそうした認識が強かったし、また文部当局においてもアウイの凸字以外に採用する意思はなかった。したがってせっかく完成した点字も、ルイの指導を受けた生徒間に非公式な文字として使われていたにすぎなかったのである。

一方バルビエもなお研究を続け、自分の文字の普及に努めていた。1822年に『失明者用夜の文字』という論文を発表し、翌1823年にはフランスアカデミーにおいて、自分の考案した新しい文字の実演をしたいと願い出ている。こうしてバルビエは頑強に自分の文字を失明者用文字として採用させようとして、しばしば盲学校を訪問してはピニエ校長を悩ませていた。

しかし1833年頃になると、さすがのバルビエもブライユの点字の優秀性を認めざるを得なくなっていたようである。バルビエはルイに対して「あなたの年頃であなたのように着想したことは立派です」と手紙で書き送っているし、その後出版した本の中でも「点字を書くために3行の溝の付いた定規を使うという素晴らしい発想をしたのはパリ盲学校の若い学生のルイ・ブライユであった。その文字は書くのも読むのも容易である。我々は

彼に感謝すべきである」と述べているからである。しかし点字の考案に関しては、ルイ・ブライユとともに、シャルル・バルビエの名前も記憶せられるべきであろう。そのシャルル・バルビエは、1841年4月29日にこの世を去った。74歳であった。

1833年にルイは正規の教員に昇進した。しかしその後残念ながら病魔に悩まされることが多くなったのであった。病魔に悩まされながらも、彼は点字の改善という大きな目標を1日も忘れることはなかった。

その頃パリ盲学校に、ヘイターというイギリスからの留学生が在学していた。ルイの教えを受け点字をマスターしていたのであるが、ルイは彼の訴えを聞いて、1836年にアルファベットに「w」を追加した。アルファベットは、ブライユの点字配列表の1行目、2行目、3行目の文字から構成されているが、これに4行目の文字が混在することになったのはそのためである。しかし「w」を加えることによって英語も完全に書くことができるようになったのであった。

さらに1838年には、『初学者用算数の概要』という点字書も発行している。

ルイはもちろん点字が正式な文字として、教育に取り入れられることを望んでいたし、彼の指導を受けて点字に習熟した生徒たちもそれを強く望んでいた。しかし事態はむしろ悪い方向へと向かうのである。1840年に点字に好意的だったピニエ校長が退き、その後任として点字使用に強く反対していたデュフォーが就任したからである。

ピニエの退職はルイにとって大きい痛手であった。しかし思いがけないことから、点字が広く知られるチャンスに恵まれることになるのである。舞台は盲学校落成祝賀会の会場であった。

パリ盲学校がアンバリッド通りに新築され、1844年2月22日に盛大な落成式が行なわれたのであるが、それより先デュフォーは校長就任にあたって、甥のジョセフ・ガデを自分の協力者として採用していた。しかしガデは盲教育とは無関係な文学者であり、現実主義者でもあった。彼はデュフォーが禁止しているにもかかわらず、生徒たちが点字に執着している姿を毎日観察していた。そして点字は読むスピードにおいても、デュフォーの開発した凸字の比ではないことも見ていたのである。そんなことがあって、

彼は点字こそ失明者のための文字であると確信するようになり、デュフォーの考えも変えさせようと思うようになるのである。そのためには何らかのきっかけも必要だし、チャンスにも恵まれなければならないと考えた。そこで彼は新築落成式をそのチャンスに選び、プランを練ったのであった。

新築祝賀会場にはフランス政府の高官をはじめ、生徒の父兄や卒業生など、多くの人が出席していた。プログラムはコーラスクラブの合唱から始まった。歌われたのはデュフォーとゴーティエによって作詞作曲された「アウイに捧げる歌」であった。それに生徒有志の詩の暗誦やピアノ演奏などが続いた。その後ガデが用意したプログラムが展開されることになるのである。

最初に登場したのはデュフォー校長であった。意外なことに彼は「点を使って文字を表す方法について紹介する」と宣言し、バルビエのソノグラフィの開発過程や問題点を説明し、それをルイ・ブライユが大変使いやすいものに改良したことについて述べたのである。あのデュフォーの口から大勢の人の前で、ブライユシステムによる点字という言葉が出たのであった。しかも『失明者用点字の書き方説明』と題する1冊のパンフレットまで配布されたのであった。これにガデの用意したプログラムが続いた。まず壇上に立たされたのは点字盤を持った盲目の幼い少女であった。そして彼女は来賓の1人が暗誦する詩を点字で書き取ったのである。次に壇上に立ったのはその会場外から連れてこられたやはり盲目の少女であった。そして彼女は先に書き取られていた詩の用紙を渡され、それをスラスラと読んだのである。次に壇上に現れたのは、盲目の少年であった。彼は客の1人が静かに歌った歌のメロディーを楽譜に書き取った。そこへやはり会場外から1人の少年が連れてこられて、その楽譜を見ながらメロディーを口ずさんだのである。こうして大勢の見守る中で、点字の読み書きの実演が披露されたのであった。

割れるような拍手が起こった。ガデの計画は見事に成功したのであった。目立ちたがり屋のデュフォーはまんまとその計画に乗せられた形となったのである。こうして点字史上忘れることのできない大ドラマが演じられたのであった。ルイの予期せぬ事態であり、彼自身も驚いたが、同時に彼の

長年にわたる苦闘が報いられた瞬間でもあった。

『点字発明者の生涯』(La vie et l'oeuvre de Louis Braille)の著者ピエール・アンリは、その著書の中で「ブライユシステムの点字が使われるようになったのは、外からの力によってではなく、失明者自身の止むに止まれぬ要求からなのだ」と記している。

デュフォーの“点字使用禁止令”は解かれ、それ以後、校内においてもかなり自由に点字が使えるようになった。その頃には、デュフォーもブライユシステムの点字の価値を認識するようになっていたので、種々の印刷方法も開発されていった。その中には6点を表す活字による印刷方法などもあったとのことである。こうして点字は静かに失明者の中に広まりつつあったが、フランス政府はなお凸字にこだわっていて、点字を公認しようとはしなかった。結局正式な文字として、ブライユシステムの点字が公認されたのは、ルイの死後2年を経た1854年のことであった。

2. ルイ・ブライユの生涯

シモン・ルネ・ブライユ(Simon René Braille)とモニック・バロン(Monique Baron)との結婚式が行なわれたのは、1792年11月5日のことであった。その日、パリの東約40キロにあるクーブレール(Coupevray)の村の教会は、ロースクに照らされ、秋の草花に飾られていた。その頃、フランス革命はまだ続いていたが、パリから40キロも離れているこの村の人々は、首都における革命の嵐についてはほとんど知らなかった。家々の戸口から村の人々は愛を込めて新郎新婦に挨拶した。固く握手をする者もあり、「幸福な人生を送ってたくさんのお子をお育てなさい」と、伝統的な祝詞を述べる者もあった。こうして家庭を築いたシモン・ルネとモニックには4人の子供が授かったが、その末っ子として、1809年1月4日に生まれたのがルイ・ブライユであった。

クーブレールは古風な小さい村で、ルイが生まれた当時の人口は610人で、170軒の家に住んでいたという。ルイの父、シモン・ルネ・ブライユはこの村で馬具製造を業としており、1軒の住宅と1戸の仕事場とを持っていた。それらが今も「ブライユ記念館」として保存されている。

シモン・ルネはその地方で「正直な職人」という評判を取って、商売も繁盛していた。

月日は流れてルイは大きくなり、歩き始めていた。天気の良い日には、戸外に出て中庭の芝生の上でよく遊び、父はなめし革の強い臭いの漂う仕事場において、開け放された窓からその姿を見るのが楽しみだった。その仕事場の真ん中には、櫨の木で作ったがっしりした仕事台が置かれていて、父はその上で革を切ったり曲げたりして、鞍や手綱などを作っていた。その脇には、革を切るナイフや、穴を開ける錐のような道具が、ピカピカに研ぎ上げられて並べられており、それらを自由に使いこなして楽しそうにやっている父の仕事を3歳のルイは好奇心をもって眺めていた。そしてある日ついにその仕事台によじ上るのである。それは父が庭に出て馬具の修理のことか何かで、村人と話し込んでいたほんのちょっとの間の出来事だった。

ルイは片手にナイフか錐を持ち、他の手に革の切れ端を持って父の仕事の手つきを真似ようとしていた。その手が滑って眼を突いてしまったのである。しかしその様子を見ていた人はなく、何の記録も残ってはいない。分かっているのは1812年の出来事だということだけで、それ以上詳しい日時も分らない。多くの人の記憶にあるのは、仕事場から聞こえてきたルイの泣き叫ぶ声と、顔中を血まみれにしたその姿のみであった。

眼を突いたのがナイフだったか錐だったかも定かではない。ルイ自身も鋭い尖ったものだったことしか覚えていなかったという。

もちろん両親はできる限りの手を尽くした。しかしルイの眼はついに化膿を起こし、当時の医学ではそれを治療する積極的な方法がなかった。そうこうしているうちにその化膿が他の眼にも波及して両眼とも腫れ上がり、視力が次第に衰えていった。このようにして暗黒が忍び寄り、5歳になる頃には両眼とも完全に失明していたのであった。

1815年にクーブレの教会にジャック・パリュイという新しい神父が就任してきた。神父の最初の仕事は教区の家々を訪ねて歩くことだったが、すぐにブライユ家の人々とも親しくなり、賢そうな盲目の少年に関心を持って、手元に招いてちょっとした教育を始めるのである。それは天気の良

い日には教会の庭で、また雨の日や寒い季節には神父館で行なわれた。ここでルイは、たくさんの植物や動物の名前を覚えたり、季節の移り変わりについて学んだりしたのであった。もちろんパリュイは聖書についての教えにも力を注いだ。こうしてルイの心の奥に神を信ずる気持ちが芽生え、パリュイ神父によって育てられたこの信仰は、生涯彼の心から離れることはなかったのである。

ちょうどその頃、クープレーの学校に新しい校長が就任した。若くて熱心で骨身を惜しまないアントワヌ・ベシュレである。パリュイ神父は直ちにベシュレを訪ね、ルイの就学について相談した。そしてベシュレは直ちにルイを受け入れることに同意したのであった。

年齢に達したルイは毎朝友達の1人と一緒に村の学校に通うようになった。もちろん文字を読むことも書くこともできなかったが、先生の話懸命に聞いて記憶した。教室ではその前日に学んだことをよく暗誦させられたが、ルイの抜群の記憶力に先生も感心させられることが多かったという。そして彼はいつもニコニコして元気だった。

しかしパリュイは、ルイの未来のことについて心配していた。そして思いつく限りの人に、ルイのためにいい方法はないかと聞いて回ったのである。

ベシュレはパリで勉強していた時、盲学校の存在について聞いたことがあった。そのことを知ったパリュイはもっと詳しいことを調べ始め、クープレーの村をはじめこの地方全体を治める領主のドルヴィリエ侯爵を訪ねるのである。公爵はルイを教会で見かけて知っていた。そのうえパリの盲学校のことも知っていたのである。1786年にベルサイユ宮殿でのクリスマスのお祝いの時、パリ盲学校の創立者バランタン・アウイに会ったこともあり、その盲学校のために寄付をしたこともあるというのだった。

ドルヴィリエ侯爵はパリュイの願いを聞き入れ、パリ盲学校の校長に手紙を書き、ルイの入学について依頼してくれた。返事はすぐにきて、ルイのパリ盲学校への入学は決まった。

1819年1月下旬にルイの両親は、パリ盲学校のギーエ校長から1通の手紙を受け取った。それには、1月15日の職員会議でルイ・ブライユの入学

願書を受理したこと、入学後は奨学金を与えること、入学の日時は1819年2月15日とすることなどが記されていた。

1819年2月15日の朝早く、ルイと彼の父を乗せた馬車はクーブレーを出発した。そして約4時間の旅の後、当時ヴィクトール街にあったその学校に着いた。新しい生徒の来ることを待っていた年老いた守衛は、この親子を直ちに校長室に案内した。ギーエ校長は彼らを迎えて、穏やかに学校の生活や日常の仕事について話した。父のシモン・ルネ・ブライユは、息子のためにはこれ以上良い所はないと思い、必要な2、3の手続きを済ませ、長い間ルイを抱きしめてから、クーブレーに帰って行った。

校長はデュフォー先生の教室に彼を連れて行った。地理の授業の最中で、フランスの国を横切って流れるセーヌ川の川筋についての勉強中であった。教室には14、5人の生徒がいた。デュフォー先生は新人の彼に名前を聞き、1つの空席に座らせた。

家を出るときからルイの心にかかっていた危惧は消えた。彼は両親から遠く離れて来たことも、これから知らない人々の中で暮らさなければならぬことも忘れて、授業にとけ込んだ。そしてその優れた記憶力で、セーヌ川について話されたことを心に銘記したのであった。

数週間が夢のように過ぎた。クーブレーの家族からは何通もの手紙がきて、心細いルイを慰めてくれた。手紙を読んでもくれたのは寮母だった。そして学校の生活にも慣れ、友達も次第に増えていった。特に寄宿舎での最初の夜、彼に声をかけ、両親の元を離れて心細く思っていた彼を慰め力づけてくれたのは、同じクラスのガブリエル・ゴータイエだった。かくしてこの2人は生涯変わる事のない友情で結ばれることになるのである。

この学校で何よりもルイを喜ばせたのは授業だった。地理・歴史・数学・文法など、どの学科もルイは夢中になって勉強した。そのほかにいろいろな手仕事も教えられた。箆作りや編物、スリッパ作りなどにも1度も困ることはなかった。小さい頃から父の手伝いなどをして、手先が器用だったからである。学年の終わりには編物やスリッパ作りで賞を受けたこともあった。

また音楽教育も盛んだった。パリの音楽学校から先生が来て、フルート

やバスーンやピアノなどを教えていたのである。ルイはピアノを習ったが、ここでも才能を発揮し、やがて大きく花開くことになるのである。

だがルイを最も喜ばせたのは、触覚で読むことのできる本やパンフレットがあったことだった。この学校の創立者、バランタン・アウイが、失明者のための本を印刷する方法を開発していたのである。それは鉛で作った特別の活字で厚手の紙の裏面から押圧し、紙の表面に文字の形を浮き出させたものであった。それを指でたどりながら読むのである。1字1字確かめながら読まなくてはならないので読書には時間を要したが、自ら読み得る本があるというのは素晴らしいことだった。

ルイ・ブライユは優秀な生徒だった。彼は学習が楽しかった。そして早くから文法や地理や歴史や数学の要点について理解した。また入学当初から音楽の分野においても天分を発揮し、殊にピアノの演奏を得意とした。後年教会の優れたオルガニストとしても活躍するのであるが、その基礎はこうして養われたのであった。点字の研究に心血を注いだのは、そうした学習の合間のことであった。しかも1825年、彼16歳になるまでに、現在世界各国に普及している6点点字の原型を完成していたのだった。この業績によって、後にフランスの偉人の1人として仰がれるようになるのである。

ルイは実力が認められて、1826年から生徒として在籍しながら、教員の助手としての仕事も与えられた。また希望者にピアノの指導もするようになっていた。

1828年、卒業と同時にピニエの計らいによって母校の見習い教員として採用された。そして1833年には正規の教員に昇進するのである。しかしその後の彼の歩みは決して恵まれたものとはいえなかった。むしろ幾多の苦難を体験しなければならなかったのである。

その第1は健康の問題であった。正規の教員に昇進して、彼はますます多忙だった。何ごとにつけても几帳面だった彼は、教育と研究に追われてほとんど休養を取ることができなかった。そうした中で微熱が続き、肺が結核に蝕まれつつあったのである。1835年、26歳の彼はついに大咯血を起こしてしまった。

彼が健康を取り戻すには郷里のきれいな空気が必要だった。ピニエ校長

も郷里で静養することを勧めたが、ルイは学校を離れることを望まなかった。まだ結核が病原菌によるものであることが知られていなかった頃で、その病気に対する認識も十分ではなかったのである。彼は時とともに病気は快復するものと考えていた。ピニエ校長は大変心配し、小さい子供のクラスだけを教えればよいように手配して、彼の仕事を軽減するとともに、よく休養し、十分な栄養を摂ることを勧めた。しかしそうした中であつても彼の精神は不屈で、その独創的活動力をとどめることはできず、点字の研究や実験にもなお努力を重ねていたのである。

不幸の第2は、ピニエ校長の排斥運動が起こったことである。デュフォー教頭が他の教員と諮って校長の排斥運動を起こしたのであった。そして「ピニエの歴史の授業は、生徒たちに誤った認識を植え付ける」という報告書を作って文部省に提出したのであった。信じ難いことではあるが、文部省はこの告発を受け入れて、1840年にピニエは引退させられたのであった。こうしてパリ盲学校は、20年にわたって心から失明者の教育に尽くし、ルイの応援者でもあったピニエ校長を失うことになるのである。

1840年にピニエの後任としてデュフォーが校長に任ぜられた。デュフォーは権力欲の強い人で、自分の力を示すためにさっそく学校の改革に取り掛かった。毎日何か新しいことが起こった。目の不自由な子供たちにとって、それまで慣れてきた環境が急に変化するのには混乱を招くことになるが、デュフォーはそんなことに心配りをする人ではなかった。またデュフォーは失明者も普通の文字を使うべきだと固く信じていて、点字のような特別な文字を使うことは失明者の差別につながり、彼らを学問から遠ざけることになるのだと主張して譲らなかった。生徒たちがアウイの凸字よりもブラユの点字システムを使いたがっていたにもかかわらず、その点字の使用を禁止したのだった。

その頃ルイは再び健康を害していた。1843年に入って間もなく、彼は数回の咯血を起こし、このたびは医師も田舎の良い空気の中で静養しなければならないと強く忠告した。そこで1843年4月初めに故郷のクーブレーに帰り、6か月の休養を取ることにした。

田舎の空気は新鮮で爽やかだった。そのうえに家族の温かい愛情に包ま

れて彼は十分に静養することができた。こうして次第に新しい力が体にみなぎってきて、全快したのではないかと錯覚するほどにさえた。

6か月の静養を終えてルイは10月初めにパリに戻った。ところが学校は前より居心地が悪くなっていたのだ。彼の病氣静養中にデュフォーは1つの思い切った改革を行っていたのだ。その頃イギリスやアメリカでは凸字の研究が盛んで、アウイのそれとは異なった字形の凸字が開発されていた。デュフォーはそれらの影響を受けて、アウイの凸字の大きさや字形を変えて、新たな凸字を開発し、それまでに作られていたアウイの文字による本をすべて廃棄してしまっていたのである。ギーエ校長の作った26タイトル、ピニエ校長の作った47タイトルの本もすべて灰になってしまっていたのであった。

生徒たちは新しい大きさ、新しい形の文字を読み取る練習を最初からし直さなければならなかった。言うまでもなくデュフォーのプランの中にブラリュの点字システムは含まれていなかった。

こんな有り様の中でも、生徒たちは頑固に点字を使い続けていた。授業時間以外に互いに教え合い、ノートを取るにも、手紙を書くにも、それを使うことを決して止めようとはしなかった。生徒たちがこれほどまでに使いたがる点字をデュフォーは禁止し、点字を使っているのが見つかるのと罰したのだ。

ルイの失望は大きかった。だが冬枯れの後には必ず新緑の春が巡ってくるように味方が現れ、ルイの上にも光の射す瞬間が訪れるのである。思いがけないことではあったが、それはジョセフ・ガデという人物の登場によって、もたらされたものであった。

ジョセフ・ガデはデュフォーの甥で、デュフォーの校長就任に際して採用された人物であった。彼は盲教育には関係のない文学者であったが、就任後点字に興味を持ち、ルイに味方するのである。そして不合理な点字使用禁止令を解き、デュフォーにも点字の効用を認識させるために策を練るのである。

ヴィクトール街にあった校舎は、不便でかつ非衛生的でもあった。そこでフランス議会が盲学校の移転を決議し、政府を動かして、アンバリッド

通りに校舎を新築することになった。そしてルイが病氣静養から戻って間もなく工事が完了し、1843年11月11日に移転を完了した。ちなみにそれがパリ盲学校の現在地でもある。

翌1844年2月22日に盛大な落成式が挙行された。その席上で点字の読み書きを披露するというガデのパフォーマンスが行なわれたのであった。このパフォーマンスは点字が広く知られる1つの起因となったのである。

それ以後デュフォーも点字に関心を示すようになった。しかしこの喜びもつかの間、ルイは3たび病魔に倒れるのである。学校の移転、彼の授業の再開および落成式の準備などが病身な彼には大きい負担となったのであろう。デュフォー校長は彼に休養を命じるとともに校内に滞在して必要な治療を受けることができるよう当局に許可を求めた。こうしてまたもルイの闘病生活が始まるのである。

今度の休養は長く、3年にも及んだ。1847年に至り健康を回復したように思われ、医師の勧めもあってデュフォーは彼の授業の再開を許可した。3年を経て彼はようやく教壇に立つ喜びを味わったのであった。ただそれも束の間の喜びにすぎず、1850年には体力の衰えを感じて、退職願いを出さなければならなかった。しかし彼の年金は少なく、日常の必要を満たすことができなかったので、デュフォーは彼を学校内に住まわせ、ときどきピアノの授業をするようにして、自分の収入で暮らすことを勧めた。こうしてルイは周囲の人々の愛情に包まれて約1年静かな生活を送るのであるが、風邪をこじらせ、1851年12月4日に、激しい咯血を起こした。それは再び病床を離れることのできなくなる大きな打撃であった。その後数日のうちに何回も同じような咯血があり、彼自身地上での仕事の終末を自覚するに至るのである。10日後迎えたクリスマスは、ベッドの上で祝った。子供の頃パリュイ神父から教えを受けて生涯持ち続けてきた深い信仰によって、神に祈り感謝を捧げた。

こうして1852年1月6日に彼は静かに最期を迎えたのである。まだ43歳の若さであった。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

点字の履歴書

点字に関する12章

2012年4月8日 発行

著 者 阿佐 博

発行者 社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター

〒167-0043 東京都杉並区上荻2丁目37番10号 Keiビル

TEL (03)5310-5051 FAX (03)5310-5053

<http://www.siencenter.or.jp/>

印刷所 タナカ印刷株式会社

〒104-0031 東京都中央区京橋3丁目12番4号

TEL (03)3567-2551 FAX (03)3564-2920

点字の履歴書

点字に関する12章